

2023. 4	5	6	7	8	9	10	11	12	2024. 1	2	3
収集された海外の陶磁器 赤平史香展 収蔵名品展		北川民次コレクション		瀬戸染付開発の嫡流 収蔵名品展		瀬戸ノベルティの至高		中谷聡 石彫展 瀬戸の近代陶磁 レジデンス招聘作家作品展		加藤英 水彩画展 収蔵名品展	

2023/4/15(土)－5/28(日)

特別展

休館日：5/9

収集された海外の陶磁器

一国立研究開発法人産業技術総合研究所
中部センター収蔵品を中心にー

国立研究開発法人産業技術総合研究所中部センターには、100年以上も前より収集された参考収集品約1000点が所蔵されています。本展では、日本の陶磁器技術やデザイン等の発展に寄与するために収集された作品群の中から、海外の作品を紹介することで、日本が当時何を参考にし、目指していたのかを明らかにしたいと考えています。加えて、瀬戸市が収集していた海外の作品を同時に展示することで、産地における取り組みも紹介します。



《軸下彩花文花瓶》セーヴル[フランス]1903頃、愛知県陶磁美術館管理(産業技術総合研究所 中部センター蔵)

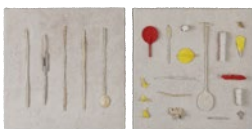
特別展

せとのフェスタ2023

瀬戸・藤四郎トリエンナーレグランプリ受賞者展

赤平史香展

2022年に開催された第4回瀬戸・藤四郎トリエンナーレでグランプリを受賞し、「土」そのものを絵画的素材として用い、原土の新たな可能性を感じさせるなどと評価された赤平史香氏の個展を開催します。



《ダーマトグラフの針の先》2022

2023/6/3(土)－7/30(日)

特別展

休館日：6/13、7/11

北川民次コレクション 全員集合！

瀬戸市美術館では北川民次の作品をコレクション収集の大きな柱としています。本展では、近年に購入及び寄贈いただいた作品を含め、瀬戸市美術館所蔵の全作品を展示します。油絵や水彩、版画、そして陶器に絵付したもの等様々な北川民次の表現をご覧いただけます。

2023/8/5(土)－10/1(日)

特別展

休館日：8/8、9/12

瀬戸染付開発の嫡流 一大松家と古狭間家を中心にー

瀬戸における磁器生産は江戸時代後期に開始します。磁器開発を主に担っていたのは磁祖加藤民吉に代表される「大松家」と、加藤忠治に代表される「古狭間家」と言えます。本展では、「大松家」と「古狭間家」という初期瀬戸染付を語る上では欠かせない二つの家系に関連する作品等を展示するとともに、民吉が修業した長崎県佐々町の窯跡から採集された陶片などを展示し、当時の瀬戸染付発展の状況をご覧いただけます。



加藤源吉《染付松竹梅徳利》1860、瀬戸蔵ミュージアム蔵

2023/10/7(土)－11/26(日)

特別企画展

休館日：10/10、11/14

瀬戸ノベルティの至高 － Made by MARUYAMA －

瀬戸ノベルティを代表するメーカーである丸山陶器が制作した代表的なノベルティを一堂に展示する初めての展覧会です。昭和の時代に世界中から愛された丸山陶器製のノベルティの技や美の象徴である精緻な人形など、瀬戸ノベルティの最高峰とも言える作品群をご覧いただけます。



《三曲合奏ピアノ置物》1937、個人蔵

2023/12/2(土)－2024/2/4(日)

企画展

休館日：12/12、12/28-2024/1/4、1/9

中谷聡 石彫展

1959年、長野県生まれ。信州大学教育学部美術科卒業後、富嶽ビエンナーレ展にて大賞、新制作展では新作家賞を受賞しました。2011年には、愛知県立芸術大学大学院修了し、修了制作は買い上げ賞となりました。現在、新制作協会会員、愛知県立芸術大学にて教授を務めています。

2023/12/2(土)－2024/4/14(日)

企画展

休館日：12/12、12/28-2024/1/4、1/9、2/13、3/12、4/9

東洋陶磁学会設立50周年大会開催記念 瀬戸の近代陶磁

明治時代の瀬戸のやきものを一堂に展示します。明治時代は日本政府によって殖産興業が進められ、瀬戸のやきものは重要な輸出品目として捉えられました。また、欧米から最先端の技術を習得し、研究、開発、改良が進められました。今回の展示では、欧米各国を魅了した近代の瀬戸のやきものの技と美をご覧に入れます。

2024/2/10(土)－4/14(日)

特別展

休館日：2/13、3/12、4/9

加藤英 水彩画展

現在、日本水彩画会理事であり、名古屋支部長である瀬戸市を拠点に活躍する加藤英氏は、2001年に日本水彩展で内閣総理大臣賞を受賞されました。本受賞作を含め不透明水彩で描く静物画から透明水彩で描く世界各国の風景画など加藤英氏の幅広い作風とこれまでの画業を一堂にご覧いただける展覧会です。



《メモリータイム》2001